走れUMI

Run, UMI, run!

篠原勝之

Katsuyuki Shinohara

講談社文庫

著者 篠原勝之　1942年札幌市生まれ。鉄の町、室蘭市で少年時代を過ごす。上京後、絵本、舞台美術、小説、エッセイなどで活躍し注目を集める。'86年から鉄を素材に作品を作り始め、以後モニュメントなどのダイナミックな造形を世界各地に生み出している。著書に『カミサマ』『もちおもり』『A（アンペア）』などがある。

走（はし）れUMI（ウミ）
篠原勝之（しのはらかつゆき）
© Katsuyuki Shinohara 2013

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2013年6月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277566-3

走れＵＭＩ　目次

1　僕のUMI　……9
2　日之出のエジソン　……20
3　コロ　……33
4　ミカン山　……49
5　再会　……74

6 宝箱 …… 96
7 宵宮（よいみや） …… 105
8 鯛の大王 …… 134
9 海の悪魔 …… 165
10 宿題 …… 189
解説　金原瑞人 …… 197

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章
走れUMI章

篠原勝之

講談社

走れUMI　目次

1　僕のUMI　9
2　日之出のエジソン　20
3　コロ　33
4　ミカン山　49
5　再会　74

6 宝箱 …… 96
7 宵宮（よいみや） …… 105
8 鯛の大王 …… 134
9 海の悪魔 …… 165
10 宿題 …… 189
解説　金原瑞人 …… 197

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

走れUMI

1　僕のＵＭＩ

学校から戻った僕に店番をいいつけて、父さんは商店街の寄り合いに出かけてしまった。お客といっても、たまに空気入れを借りにくるママチャリのおばさんぐらいだから、店の奥の古びた回転椅子に座り、機械油がしみこんで黒ずんだ作業台で苦手な算数の宿題をしていた。

分数の引き算でつまずいてからは、ノートのはしに絵ばかり描(か)いている。どの教科も僕のノートの大半は数字や文字よりも、虫や魚や人の絵で埋められている。落書きにもいいかげんあきてきて、ボールペンをもてあそびながら椅子をぐるぐる回転させていたら、だし抜けに、ピカーッ、と目に光が刺さった。

西陽(にしび)を受けた店頭の自転車に反射した光が、もろに僕の目にジャストミートしたの

だろうけど、ついにオーラを放ったと勘違いするくらい、大好きなマウンテンバイクが真夏の明るい海の色に輝いた。

まぶしいのを我慢してうっとり眺(なが)めながら、ノートいっぱいに走りだすマウンテンバイクを描いていた。

ボールペンの青い線がズンズンふくらんでノート全体がたちまち海になっていった。次々と押し寄せる大きな波が分数問題をあっさりと海の底に呑みこんだ。青いマウンテンバイクは海の上をスイスイ走りだしていた。

いつか僕もこんな色の自転車に乗って走りたい。

ターコイズブルーのインク。今日描いた一枚は宝箱入り決定だ。

ノートの綴じ目に定規(じょうぎ)をあてて、ていねいに切りとった。

太陽が灯台の方角に沈むとき、自転車がいつものメタリックな青に戻ってしまうのは、地球が止まっていない証拠だ。

宝箱に収める前にもう一度眺めているうち、ちょっとだけマウンテンバイクを走らせてみたくなった。

「ここにある自転車はお客さんの物になるんやから、傷なんかつけたら承知せえへんぞ」

父さんからつねづねそういわれていた。勇ましく反りかえったハンドル、二十六インチの車輪にWサスペンション、十八段変速ギアの本格的なマウンテンバイクだ。

父さんが帰ってくるまではまだたっぷり時間がある。ちょっとだけ、と思って反りかえったハンドルを握り、スタンドをそっとはずしてみた。

ちょっと。またがってみるだけ。

誰もいない昼下がりの通りを見回してから、僕はサドルにまたがってみた。今まで乗っていた子ども用自転車とは大違いで、背伸びをしたように目の前がひらけた。

アスファルトの細かい凹凸を捉えたタイヤの感触が、サスペンションを通じてサドルに伝わってくる。スニーカーで地面を蹴(け)ると、マウンテンバイクは音もなく店先を離れた。

あそこのポストまで。

あのタバコ屋までだから。

次の角で引き返すから――。

港からの向かい風を受けた僕と自転車はもう止まらなくなっていた。左足がペダルを踏みこむ。防波堤に向かって加速した。止められない夢見心地は寝小便にちかい気分だった。

ペダルと足はぴったりとくっついて回転し、どこまでが僕の身体でどこからが自転車なのかわからないくらい、僕と自転車はひとつの生き物になっていた。

速いぞっ！

ロープの束や、浮き球、漁網などを置いてある防波堤の根元は少し広くなっていて、そっちこっちにオレンジと紫がまざった色の海星が散らばっている。漁師が陸に揚げたのを、カラスが突つきまわして散らかしたのだ。その障害物の間を小刻みにターンしながらすり抜ける。

前輪を浮かせてみた。後輪だけのウィリー。

小学校の入学祝いにプレゼントしてもらった自転車ではできなかったことも軽々達成した。ますます調子にのってしまった僕はウィリーの体勢でギアをトップに入れた

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com